

2016（平成28）年度 年次報告書

第16代理事長小里貞利氏逝去（2016年12月14日）
－仮事務所（港区虎ノ門）2年目－



完成間近の三代目日本青年館（2017年3月）

一般財団法人日本青年館

I . 公益活動

1 . 青年活動振興事業

1) 第65回全国青年大会（11月11日～14日 東京体育館他）

全国青年大会は、講和条約発効を記念して1952（昭和27）年に第1回大会が開催され、以来、勤労青年のスポーツ・文化活動の発表と技能向上の場として、全国の青年団が中心となって毎年東京で開催しています。この大会は、一部の種目を除き国民体育大会や国際競技会などに出場した経験のある選手には参加資格がなく、地域で地道にスポーツや文化活動に携わっている青年が参加するものです。地域のスポーツ、文化活動の裾野を広げ、より多くの青年たちに活躍の場を提供するとともに、全国から集まった青年たちの交流と友好を深めることにも重点を置くことにより、平和で文化的な住みよい地域を創っていくことを目的にしています。

第65回大会の参加者数は交流種目を含めて37都道府県から1,897名。開会式では、安倍内閣総理大臣からいただいたメッセージを紹介したほか、三笠宮崇仁親王殿下の薨去により瑤子女王殿下のお成りは叶いませんでしたが、第1回全国青年大会で殿下より賜った「青年は二度と銃をとらない」をはじめとする殿下の平和への思いと青年への期待を紹介しながら哀悼の意を表しました。

各競技においては、東京体育館や講道館、大田スタジアム、江戸川総合文化センターなど各会場で熱戦・熱演が繰り広げられました。なお、民俗芸能の形を変えずに若者の力で継承している団体に贈られる後藤文夫賞は、民俗芸能の部に「西岩代の獅子舞」で出演し、最優秀賞に輝いた和歌山県の西岩代伝統芸能保存会が初出場でのダブル受賞となりました。

今年度の全国青年大会実施種目は以下の通りです。

<スポーツ> バレーボール、バスケットボール、バドミントン、軟式野球、卓球、柔道、剣道、ボウリング、フットサル

<芸能文化> 合唱、郷土芸能、写真展、生活文化展、将棋、意見発表、のどじまん、舞台発表

<交流プログラム> ダーツ大会

2) 第61回全国青年問題研究集会（平成29年3月4日～6日 山中湖畔荘清溪）

「青年問題研究集会」（青研集会）は、1950年代に日本青年団協議会が創造した、働く青年の生活課題の解決をめざす学習・実践活動を集約する集会です。1954（昭和29）年に、勤労青年の教育のあり方、考え方として「勤労青年教育基本要綱」を策定した日青協は、青年の自主的学習活動として「共同学習」運動を全国に呼びかけました。共同学習運動は、仲間づくりと話し合い学習を重視し、活動や生活の身近な問題を語り合う中から共通の課題を見出し、共同の力によって課題解決の実践に取り組んでいくという、青年の主体性、自主性による実践的学習運動です。このような共同学習運動の全国的集約と発展的展開をめざす場として、日青協は1955（昭和30）年から「全国青年問題研究集会」（全国青研集会）を開催しています。青研集会は、青年個人や青年組織を巡る問題を、取り組んだ実践活動に基づいてレポート化し、テーマごとに分科会を設定して議論します。助言者の力も借りつつ参加者全体の討議によって問題の所在や社会的背景を明らかにし、再び地域で実践することで課題解決に努めることをめざしています。

今年度は16道県から71名の参加者が日本青年館分館・山中湖畔荘清溪に集まりました。

実践報告では、第65回全国青年大会意見発表の部で最優秀賞を受賞した熊本県球磨村青年団の田山伊穂里さんから、教員という立場からだけでなく、青年団活動を通じて学校では見出せない子どもたちの姿を発見できたと言った青年団活動の意義を強調する一方、青年団は保護者や地域住民によって支えられていることが報告されました。滋賀県青年団体連合会の「想いつながるふるさとプロジェクト」は、県内の青年を対象に行われている事業で、湖岸清掃をする中で空き缶を回収し、それを売ったお金を熊本地震で被害を受けている熊本に届ける取り組みが報告され、また岡山県からは岡山市北区内にある建部という地域で、地域おこし活動に取り組む20代から30代の青年たちで組織される「たけべおこしプロジェクト」の報告をいただきました。

講演では「すべては語り合いから始まる」と題し、浜松学院大学教授の大野木龍太郎氏から、長年、全国青研に携わってきた経験とご自身の青年団活動の歩みを通じて、対話と自己紹介の大切さや、青年団の地域での役割を具体的にお話いただきました。

2日目からは参加者の持ち寄ったレポートを、課題別に設定された分科会で議論を深め、最終日には参加者がそれぞれ決意を述べあって地域に帰って行きました。

3) 2016(平成28)年度青年活動支援者フォーラム

2007年から実施している、青年教育や青年活動の支援者同士のネットワークづくりをねらいとした「青年活動支援者フォーラム」は、今年度も全国青年問題研究集会と同時開催しました。募集にあたり公民館職員や自治体職員、また青年会館にも呼びかけ、様々な形で青年を支援する立場の方々が集まる場にすることをめざし、全国から11名が参加しました。

初日は、筑波大学人文社会系教授の土井隆義氏より、「承認不安の時代～現代青年のコミュニケーションをめぐる課題～」と題した全体講義を行いました。この講義には全国青研集会の2つの分科会も参加し、青年を取りまく状況を共有しました。その後、内閣府政策統括官(共生社会政策担当)付青少年企画担当主査の櫻川博三氏より、「わたしのミッションはこれだ」と題し、ワークショップを行いました。

2日目には、千葉大学教授の長澤成次氏より「青年活動をめぐる今日的課題をめぐって」と題した総括講義を行い、地域学校協働答申を受け学校と地域、また社会教育主事制度がどのように変容するかお話いただきました。

本事業を通じて、青年教育や若者支援に携わる人たち同士のネットワークが必要との意見が共有されました。今後は過年度の参加者も含めて支援者同士がつながり、各地で行われている実践を共有できるような仕組みづくりを検討していきます。

4) 全国地域青年「実践大賞」

全国の優れた青年活動の取り組みに学びあい、それを顕彰することをねらいに、全国の青年団や教育委員会などを通じて呼びかけた「全国地域青年『実践大賞』」には、15道県19実践の活動事例の応募がありました。今年度より市町村行政からの応募を対象とした「支援実践賞」を設け、全国の市町村行政への要項送付等を行った結果、行政と連携した実践や地域の過疎化に目を向けた実践、祭りや伝統芸能、震災支援や平和活動など、多岐に渡る実践が寄せられました。審査員からは「地域や社会に目を向けた実践が多く、地道でも地域で暮らす上で大切な取り組みが行われている」との評価をいただいています。審査員及び受賞団体は次の通りです。

◇審査員 萩原建次郎 氏(駒澤大学教授)

田中 浩之 氏(東京新聞広告局広告二部部長)

三友 千春 氏 (元日本青年団協議会副会長)
坂野 直子 (日本青年館公益事業部事業課長)
鳥澤 文彦 (日本青年団協議会事務局長)

■実践大賞

活動に常時または定期的に取り組み、地域に大きく貢献した実践を行った1団体に表彰状並びに活動奨励金5万円を授与する。

受賞団体 ・珠洲市青年団協議会 (石川県)
『伝えたい声・残したい思い』 ～能登の戦争体験者～
内 容 石川県能登半島における戦争体験者の記録映像DVDを作成する取り組み。

■準実践大賞

実践大賞に次いで優れた実践に取り組んだ団体に表彰状並びに活動奨励金3万円を授与する。

受賞団体 ・横枕青年団 (栃木県)
「ど田舎創生 地域住民との交流の場の提供活動」
内 容 全国のモデルとなるような中山間地域における誇りある地域づくりを軸に行われている取り組み。

■支援実践賞

青年団体発足を支えた実践や、若者のための施設における実践など、青年活動の支援に取り組んだ団体に授与する。

受賞団体 ・On Sunday (S) (岩手県)
「絵本ライブ活動」
内 容 笑う父親の姿を子供にみせる、ワークライフバランスの実現などごく当たり前の目標を、「絵本」という素材を使って行われた取り組み。

■実践奨励賞

長期間にわたって取り組まれている実践や、新たな活動に取り組んだ実践など、大賞・準大賞に準ずる団体に表彰状を授与する。

受賞団体 ・べにばなレジェンド (山形県)
「べにばなレジェンド」
内 容 市の特産であるけん玉を使いギネス世界記録認定に挑戦し、町おこしをしようという取り組み。
受賞団体 ・神流町青年会 (群馬県)
「中里地区 夏祭り (復活)」
内 容 消滅していた「ふるさと祭り」を復活させ、青年会の活性化だけでなく地域行事を実現した取り組み。
受賞団体 ・たけべおこしプロジェクト (岡山県)
「たけべマルシェ」
内 容 岡山市北区内にある建部という地域で、地域おこし活動に取り組む20代から30代の青年たちの取り組み。

■田澤義鋪賞

田澤義鋪の実績に基づき、明正選挙運動、地方自治の発展や地域振興活動に取り組み、優れた成果を収めた団体に日本青年館より表彰状と活動奨励金5万円を授与する。

受賞団体 ・西土佐連合青年団（高知県）
「西土佐地域の『成人式』」

内 容 合併後も、「自分たちの地域の新成人を自分たちで祝いたい」という思いのもと、西土佐地域で独自に行っている成人式の取り組み。

■全国青年団OB会奨励賞

全国の青年団にとって励みとなるような組織強化拡大に顕著な実績を上げた団体に、全国青年団OB会より表彰状と活動奨励金5万円を授与する。

受賞団体 ・想いつながるふるさとプロジェクト実行員会（滋賀県）
「想いつながるふるさとプロジェクト」

内 容 活動の一環として湖岸清掃をする中で空き缶を回収し、その売却金を熊本地震で被害を受けた熊本県に届けた取り組み。

■全国青年団OB県議の会奨励賞

青年団活動に自信と誇りを持ち、地域に暮らす人々の励みとなるような地域活動に顕著な実績を上げた団体に、全国青年団OB県議の会より表彰状と活動奨励金5万円を授与する。

受賞団体 ・北中城村青年連合会（沖縄県）
「沖縄県北中城村東北エイサープロジェクト ～東日本へ北中城から～」

内 容 東日本大震災後に被災地へ訪れ、エイサーを披露する支援だけでなく、被災者の声を聞き、地元沖縄で報告会を開催した取り組み。

■後藤文夫賞

後藤文夫（1934～1936、岡田内閣で内務大臣、1979年95歳で逝去）は、日本青年館理事長を2度（1930～1934、1956～1969）にわたり務め、開館当時より民俗芸能の発掘や発展に尽力してきました。その功績を偲び、1991年度より「全国青年大会郷土芸能部門」に後藤文夫賞を創設し、民俗芸能の形を変えずに若者の力で継承している団体に表彰状と活動奨励金5万円が贈られます。

受賞団体 ・西岩代伝統芸能保存会「西岩代の獅子舞」（和歌山県）

5) 第47回北方領土復帰促進婦人・青年交流集会（7月16日～17日 根室市）

日青協は1966（昭和41）年より北方領土返還要求運動に取り組み、1970（昭和45）年より婦人会の全国組織である全国地域婦人団体連絡協議会とともに、北方領土を望む納沙布岬での視察、北方領土問題の学習、元島民の返還への思いを聞くなどの内容で、北方領土復帰促進婦人・青年交流集会を開催してきました。

また日青協は北方領土返還要求署名運動、世論啓発のための全国キャラバンなどにも取り組み、北方領土返還要求運動連絡協議会の議長団体も務めています。今年度は全国から94名が参加して、第47回北方領土復帰促進婦人・青年交流集会を実施しました。集会では元島民や二世の方々との交流、返還運動関係者が加わったグループ別意見交換会などを行い、北方領土返還要求運動の重要性を再認識する機会となりました。

6) 中華全国青年連合会との交流

日青協は1956（昭和31）年より中華全国青年連合会（全青連）との交流を行っています。

(1) 第25次植林訪中団の派遣（8月26日～31日 中国内モンゴル自治区）

長年にわたる中国の青年たちとの交流の経験にたち、1992（平成4）年より、軍事によらない国際交流と地球環境の保全という視点から、中国で最大の青年組織である中華全国青年連合会と共に、内モンゴル自治区で沙漠の緑化事業に取り組んできました。2001（平成13）年には日本政府が日中緑化交流基金を設立、日青協も基金から助成を受け、内モンゴル自治区に加えて河北省豊寧満族自治県でも取り組んでいます。

今年度は、内モンゴル自治区オルドス市達拉特旗（ダラトキ）での植林活動に6名を派遣し、地元青年たちとともにポプラ100本を植林しました。また、今年度は中華全国青年連合会との青年交流が始まって60年、中国での沙漠緑化活動を開始して25年の節目にあたり、「日中青年フォーラム～未来に結ぶ友好の架け橋～」を現地で開催しました。このフォーラムには現地から内モンゴル青年連合会や沙漠緑化活動ボランティアの若者のほか、内モンゴル大学で日本語を学ぶ学生や教員にも参加いただいています。日中双方から活動内容の紹介と現在までの植林活動の経緯や今後の課題について話し合われました。

派遣した訪中団は以下の通りです。

団 長：照屋 仁士（日本青年団協議会会長）

顧 問：久保田満宏（日本青年団協議会顧問）

秘書長：棚田 一論（日本青年団協議会事務局）

団 員：片桐 充弘（岐阜県青年団協議会元会長）

技術者：小川 俊一（特定非営利活動法人地球緑化センター）

技術者：丸 宏樹（国立中央青少年交流の家職員）

7) 日韓青少年指導者交流事業（受入）（12月6日～9日 都内、山梨県、石川県）

2012年に（社）中央青少年団体連絡協議会（中青連）が解散した後、日青協は任意団体としての中青連事務局機能の役割を担っています。その中で、韓国青少年団体協議会（韓青協）との交流は日青協が窓口となって継続してきました。2013年度から2カ年にわたる相互交流を試み、その成果を踏まえ、2015年度より正式交流として再スタートしました。今年度は12月6日から9日にかけて、日青協と中青連の共催による「2016年度日韓青少年指導者交流事業」を実施し、韓国青少年団体協議会からチョ・ダルヒョン事務総長を団長とする4名の代表団を招聘しました。期間中は東京都と山梨県、石川県を訪問し、主に青少年教育施設の視察や郷土料理づくりの体験プログラム等を設定しました。石川県青年団協議会との意見交換では、わが国の青年を取り巻く労働問題や郷土芸能に取り組む青年団の活動について、積極的に質問が飛び交うものとなりました。プログラム外では青年団が大事にしてきた膝をつき合わせた語り合いが共にでき、こうした民間交流を継続させ、東アジア全体の平和と友好に努めていく必要性を確認しあいました。

訪日した団員は次の通りです。

団 長：チョ・ダルヒョン（韓国青少年団体協議会事務総長）

団 員：イ・ウンスク（大田青少年団体協議会事務局長）

団 員：キム・チャニョン（韓国青少年聯盟幹事）

団 員：パク・ジュウォン（韓国青少年団体協議会幹事）

8) 東日本大震災で被災した仲間の想いを風化させないための取り組み

東日本大震災から6年が経過しました。震災の被災地である岩手、宮城、福島の青年団の中には、震災の犠牲となった仲間や大きな被害を受けた仲間も決して少なくありません。日青協は震災直後より生活物資の支援やボランティアの派遣、募金活動など被災地に向けた取り組みを全国的に展開し、復興支援と震災の記憶を継承していくことに努めてきました。

今年度で第5号となる『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』（文部科学省科学研究費助成事業）を作成、配布しました。今年度は4月の地震で甚大な被害を受けた熊本県団の役員にも編集委員会に参加いただき意見交換会を行っています。『生きる』第5号は東日本大震災に限らず、熊本地震被災者の手記、阪神淡路大震災当時の青年団員の手記など多岐にわたり、多くの人たちによりこうした自然災害の経験を風化させたくないという想いが詰まった内容になりました。

あわせて作成を重ねている東日本大震災パネルは第1部「あの日の証言」、第2部「復興に向けて」に続き、今年度は第3部「明日に備える」のテーマで、震災の教訓や支援、防災・減災の活動、そこにこめられた当事者の思いから防災・減災を伝えるものとして完成しました。パネルは多くの青年団事業や青年大会で活用されています。また、東京都文京区の町内会からも問い合わせがあり、青年団以外にも広がりを見せました。

熊本地震の際には緊急募金を実施し、総額111,529円を熊本県団に贈呈しました。

2. 第65回全国民俗芸能大会（11月26日 オリンピック記念青少年総合センター大ホール）

全国各地に伝えられる民俗芸能は、各地の風土と生活の中で生まれ、地域の人々によって歴史的に育まれてきたものです。それらは国民の生活の推移を物語る貴重な民俗文化財でもあります。この大会は、このような各地の貴重な民俗芸能を舞台上で公開し、民俗芸能の重要性を多くの人々に認識してもらおうと開催してきました。

歴史をひもとくと、日本で初めて地域の芸能を舞台上で紹介したのが初代日本青年館のこけら落としとして開催された「郷土舞踊と民謡の会」で、1925(大正14)年のことでした。戦後この流れを継承してきた当事業は、通算すると76回目となります。これまでに440あまりの芸能を紹介してきました。出演者にとっては大会出場が大きな自信につながり、これを契機に芸能の保存の機運も高まり大きな成果をあげています。また、早くからこうした芸能の記録保存に取り組んできたのも当大会でした。

今年度の第65回全国民俗芸能大会は、11月26日にオリンピック記念青少年総合センター大ホールで開催しました。天候にも恵まれ多くの方々にお越しいただき、盛会裡に終了しました。また、初めての試みとして、出演者同士の交流会をセンター内のレストランで持ち、継承活動等について情報交換を行いました。出演芸能は以下の通りです。

<出演演目>

- | | |
|---------------------|------------|
| ・静岡県静岡市清沢神楽保存会 | 「清沢の神楽」 |
| ・島根県益田市益田糸操り人形保持者会 | 「益田糸操り人形」 |
| ・鹿児島県南種子町野尻・木原自治公民館 | 「西之本国寺盆踊り」 |

<企画委員>

- ・ 山路 興造 民俗芸能学会理事
- ・ 西角井 正大 前実践女子大学
大学院教授
- ・ 吉川 周平 京都市立芸術大学
名誉教授
- ・ 星野 紘 元文化庁伝統文化課
主任調査官
- ・ 齊籐 裕嗣 前文化庁伝統文化財課
主任調査官
- ・ 宮田 繁幸 文化庁伝統文化課主任文化財調査官
- ・ 吉田 純子 文化庁伝統文化課文化財調査官
- ・ 俵木 悟 成城大学文芸学部准教授
- ・ 神田 竜浩 国立文楽劇場 文楽劇部企画制作課企画制作係長
- ・ 久保田 裕道 東京文化財研究所無形民俗文化財研究室長



3. 「The Seinen」と月刊誌「社会教育」の発行

今年度は、「The Seinen」としては発行せず、「社会教育」10月号にて「若者が主役の時代」と銘打った特集を組んで発行に替えました。10月号では、「若者・青年とボランティア活動」、「全国高等学校オーケストラ20年の成果と今後」、「鹿児島青年団が元気なわけ」、「日本列島再生の鍵を握る青年団への期待」等の特集しています。

月刊誌「社会教育」は、今年度も毎月、計12回発行しました。社会教育を多様な角度から幅広くとらえ、行政、施設職員、さらに様々な現場からの情報が満載されていると各分野の方々から好評を得ています。

<平成28年度「社会教育」特集テーマ>

- 2016-04 (838号) 学びの循環をつくる ～学習なくして活躍なし～
- 2016-05 (839号) 地域学校協働活動 コミュニティ・スクール 地域連携教職員
「次世代につなぐ地域と学校・社会教育活動」
- 2016-06 (840号) 特集1 ファシリテーションで社会教育活動の輪を広げる
特集2 食育月間
- 2016-07 (841号) 創刊70周年
- 2016-08 (842号) 特集1 体験活動で社会教育の輪が広がる
特集2 公民館の未来像 学びの循環の起点
- 2016-09 (843号) デジタルアーカイブと社会教育施設
- 2016-10 (844号) 若者が主役の時代
- 2016-11 (845号) 読書の秋、図書館の秋、まちライブラリー
- 2016-12 (846号) 地域密着の「市民社会」の公益活動と「共創」時代の社会教育
- 2017-01 (847号) 働き方改革 生き方・学び方・働き方 ～これからの働き方と社会教育～
- 2017-02 (848号) 伝統文化と地域づくり

4. 図書・資料センター

日本で唯一、戦前・戦後期の地域青年団活動資料を多数所蔵する当館の図書・資料センターは、財団設立4年後の1925(大正14)年に建物の竣工とともに付設されました。以来、広く一般に公開してきましたが、とりわけ社会教育関係者、大学教員や大学院生などの研究者、自治体史編さん関係者、NHKなどテレビ関係者等多くの方々に利用されてきました。今年度は日本青年館の移転建設のため、厚木市にある倉庫で保管しています。新たな青年館資料室は二代目青年館の資料室よりも狭くなるため、現在厚木の倉庫に保管している資料や書籍の総量を整理しています。

青年館の資料を大きく分けると戦前の資料と戦後の資料に分類されます。戦前の資料については、そのまま新資料室に運び、劣化の対策も含めた保存と整理を進めて行くことにしています。また、戦後の青年館や日青協の資料も新資料室に運びます。

今年度は、戦後の一般図書や保存規程の期間を越えた青年館の保存ファイルの整理作業を厚木倉庫で行い、新資料室への引っ越しの準備を進めてきました。作業を進めるにあたっては、矢口悦子評議員(東洋大学)および、辻智子氏(日青協助言者・北海道大学)の助言をいただきながら行ってきました。

戦後の一般図書の整理作業にあたっては、青年団や青年館に関わるものや、歴史的価値のあるものなど青年館資料室へ搬入するものと、一般図書館などでも閲覧できるものや、インターネットでデータ入手可能なものなど今後の処理を検討するものとに分類作業を進めています。書籍の歴史的価値の判断にあたっては、専門家として昭和女子大学の松田忍准教授にご協力いただき、担当部職員と共に慎重に整理作業を進めてきました。

今後は、青年館オープンに向けて、新資料室の配架計画、閲覧と公開に向けた準備などを進めるとともに、中長期的な計画をたてて全体の目録完備、歴史的資料の保存と公開をめざします。各地の青年団関係資料の散逸を防ぐための手段を検討していくことも課題となっています。

また、新館に設けられるギャラリースペースの展示についても、関連資料の抽出の準備を進めています。青年館で保存している貴重な映像フィルムの多くは、NHKによって無料でデジタル化され、NHKの番組での使用の際には無料で利用できる契約をしています。今年度に入ってから利用は以下のとおりです。

No	申請日	使用映像名	番組名	種別
1	2016年8月2日	「鋤の光」	NHKスペシャル 村人はこうして満州に送られた	オンデマンド配信
2	2016年8月8日	「青年カードが生まるるまで」	ファミリーヒストリー 萬田 久子	NHK総合
3	2016年9月28日	「夏山縦走登山講習会 ～立山から針ノ木峠～」	北アルプス山岳古道を行く ～富山と長野をつなぐ“山岳ハイウェイ”の旅～	NHK総合
4	2016年10月5日	「青年カードが生まるるまで」	先人たちの底力 知恵泉 高橋是清(後編)	本放送および再放送

あわせて、映像資料使用規定を改定し、現代の価値への適正化と料金の明確化をしました。

5. 公益事業検討委員会

新しい日本青年館でどのような公益事業を繰り広げていくのか、今年度、職員間で委員会を設けて検討を重ねてきました。委員会は昨今の社会的な動向を把握した上で、新たな青年活動への支援策や資料室の活用、文化事業への取り組みなどをまとめたほか、来る財団100周年についても視野に入れていきます。報告のポイントは以下のとおりです。

1) 公益活動の重点項目

日本青年館の公益事業における一貫したテーマは、「青少年の育成と豊かな地域づくり」です。新たに取り組むべき公益事業を、以下のように整理します。

(1) 青年の育成支援に向けて

青年期の集団的な活動や学習こそが、青年を成長させ、その後の地域づくりにつながる視点に基づき、大学や関係機関と連携し、若者支援に向けて新たな制度や資格の設置を模索します。

また、青年問題研究所の機能を再開させ、実践の支援や理論化等に取り組みます。

(2) 資料室の発信と活用

日本青年館の資料は、戦前・戦後を通じて地域青年の活動記録です。専門家の協力を得ながらデータベース化やアーカイブ化に着手し、利活用の促進を図ります。

また、新しい館のギャラリースペースで、日本青年館の公益活動や地域青年団の情報を発信します。

(3) 豊かな文化を地域に次世代に

文化活動は青年活動とともに青年館の根幹です。特に民俗芸能は後継者問題が喫緊の課題です。地域振興や青年育成とも通じるものであり、具体的な方策を検討・実施していきます。

また、青年館が手がけた音楽事業や高校オーケストラ事業は、近年の公益事業で大きな成果を収めています。全日本高等学校オーケストラ連盟と連携し、施設の提供を図りながら、引き続き音楽を通じた青少年の育成に尽力します。

(4) 月刊誌「社会教育」の発行

月刊誌「社会教育」は生涯学習・社会教育総合情報誌として、70年以上にわたり発行されています。社会教育の推進において貴重な情報源としても不可欠で、内容の充実と購読の拡大につとめます。

また、「社会教育」を通じた研修事業等を実施し、人材の育成に取り組みます。なお、雑誌「The seinen」については将来的なデジタル化も視野に入れて当面は休刊とし、その内容や精神は「社会教育」が内包します。

(5) スポーツ分野への取り組み

外苑地区のスポーツクラスター構想やJSCとの関わりなど、スポーツ分野への事業展開も期待されます。スポーツ人口の地域での拡大をめざし、当面、全国青年大会の参加者拡充やスポーツイベント等での施設利用を促進します。

2) 今後の公益事業に向けて

公益事業は社会的要請に基づくものの、収支バランスが保てなければ継続できません。各方面からの支援等を模索しながら、公益財団設立への道を検討します。

6. 文化事業

1) ウィーン・ピアノデュオ・クトロヴァッツ (PDK) の交流公演

全国各地の方々に地元で世界レベルの音楽に触れる機会を提供することを目的に、ヨーロッパを中心とした海外からすぐれたアーティストを招聘し、全国的なコンサートツアーを実施しています。

今年度も世界最高峰のピアノデュオ奏者で、ウィーン国立音楽大学の教授も務めるエドワード&ヨハネス・クトロヴァッツの両名を、11月17日～12月1日（コンサートツアー）の日程で招聘しました。4会場で4公演を実施し、各地で大好評を得ることができました。公演地は下記の通りです。



11月20日 兵庫県 兵庫県立芸術文化センター小ホール （一般公演 1回）

[主催：オフィスカホル]

11月26日 東京都 町田市民ホール （一般公演 1回）

[主催：クトロヴァッツコンサート町田公演実行委員会]

11月27日 福島県 会津若松市風雅堂 （一般公演 1回）

[主催：クトロヴァッツコンサート実行委員会]

11月28日 東京都 銀座ヤマハホール （一般公演 1回）

[主催：一般財団法人日本青年館]

2) 山中湖国際音楽祭2016（9月17日～19日 山中湖畔荘清溪）



優れた音楽芸術鑑賞の機会を多くの方に提供し、文化振興と若手音楽家の発掘・育成、開催地周辺の地域活性化に寄与することを目的に、2007年から山中湖国際音楽祭を開催しています。

今年で9回目を迎えた山中湖国際音楽祭は、オーストリアから5名、日本から3名の演奏家を招いて、3日間で4コンサートを実施し、西洋音楽と邦楽によるみごとな融合に、観客から大好評を得ることができました。観客数は3日間で総勢500名を得て、無事終了しました。

<主催>

一般財団法人日本青年館、株式会社ニッセイ、山中湖国際音楽祭実行委員会

<後援>

文化庁、オーストリア大使館、山梨県教育委員会、山中湖村、山中湖村教育委員会、山中湖観光協会、富士急株式会社、一般社団法人全日本ピアノ指導者協会、読売新聞東京本社、山梨日日新聞、山梨放送、テレビ山梨

<協賛>

株式会社ヤマハミュージックジャパン、他多数

<協力>

Tanaka Keiko Office、PDK 200 Club Japan、

<出演者>

[海外]

ヨハネス・クトロヴァッツ (Johannes Kutrowatz)	ピアノ
エドワード・クトロヴァッツ (Eduard Kutrowatz)	ピアノ
クリスチャン・ショル (Christian Scholl)	ヴァイオリン
シンシア・リャオ (Cynthia Liao)	ヴィオラ
ルイス・ゾリタ (Luis Zorita)	チェロ

[日本]

米澤 浩	尺八
二代目 三山 貢正	津軽三味線
熊澤栄利子	箏
塚田 裕	アート (インスタレーション)

7. 高校オーケストラ活動支援事業

日本青年館で第1回目のオーケストラフェスタが開催されたのは1995年1月。日本青年館を活用してのオーケストラ活動を通じた青少年の育成に取り組んで、23年目を迎えました。「高校の吹奏楽は全国的な発表・交流の場があるが、オーケストラの場合はそうした場がない。ぜひそのような場を」という高校の先生方の声を受けてのスタートでした。以来、ティンパニやコントラバスなどの大型楽器の配備・充実に努めるとともに、平成10年には全日本高等学校オーケストラ連盟(事務局：日本青年館)を組織し、全国的なネットワークづくりにも取り組んできました。現在、連盟には全国99の高校が加盟しています。

今年度は、その連盟と協力して以下の4つの事業に取り組んできました。

1) 第17回全国高等学校オーケストラ・サマークリニック (8/16~19 山中湖畔荘清溪)

演奏技術のレベルアップと音楽を通じた交流と仲間づくりを目的に、全国の高校生に呼びかけて今回で17回目の開催になります(主催：全日本高等学校オーケストラ連盟、後援：(一財)日本青年館)。今回も夏休み期間中に3泊4日の日程で、関東地方を中心に23校から160名の高校生が参加。基礎的な力を高め、高校生同士の交流をはかり、プロ奏者からの直接指導による技術と人間性の向上を目標に山中湖畔荘清溪で開催しました。内容は、21名の講師によるオーケストラ楽器の各パートに分かれての基礎練習、多様な編成によるアンサンブルやオーケストラ合奏の練習、最終日には3日間の成果を発表し合うアンサンブルとオーケストラの発表会を行いました。



また、期間中に「指揮法初級講座2016年度夏季」を実施し、学生指揮者をめざす生徒同士の交流と専門知識・技術の修得の場を設け、3校・6名の生徒が受講しました。

*サマークリニック参加者在籍校は以下のとおりです。

〈茨城県〉清真学園高等学校

〈群馬県〉 県立中央中等教育学校

〈千葉県〉 県立千葉高等学校・中学校 聖徳大学附属女子中学校・高等学校
成田高等学校・附属中学校 県立小金高等学校 県立津田沼高等学校
県立四街道高等学校

〈東京都〉 品川女子学院 淑徳中学校・高等学校 明治大学附属中野中学校高等学校
日本大学豊山中学校・豊山高等学校 国立音楽大学附属中学校・高等学校

〈神奈川県〉 洗足学園中高等学校 森村学園中高等部 関東学院中学校高等学校
県立横浜平沼高等学校

〈新潟県〉 県立高田高等学校

〈長野県〉 松本深志高等学校

〈岐阜県〉 県立大垣南高等学校

〈京都府〉 京都女子中学・高等学校

〈宮崎県〉 宮崎学園高等学校

2) 第23回全国高等学校選抜オーケストラフェスタ（平成29年1月5日～7日：文京シビックホール）

全国の高等学校のオーケストラ部、弦楽部等を対象に、その技術力・表現力の向上と交流を深めることを目的に、全日本高等学校オーケストラ連盟と（一財）日本青年館との共催で開催しました。第1回から日本青年館で開催され、年々規模が拡大してきましたが、日本青年館の移転建設に伴い、昨年に引き続き東京・文京シビックホールに会場を移して第2回目を開催し、全国から59校のオーケストラ部や弦楽部の生徒3,058人が参加しました。



フェスタは今回も3つの内容で構成し、実施しました。メインは各学校の演奏です。同時に、会場で聞いている生徒一人一人が、演奏校へのメッセージカードに感想を書き、演奏することと演奏を聴き合うことの両方を大切にしてきました。各校は、このメッセージカードの内容を励みに、日々の練習に力を入れています。

二つ目はそれぞれの学校から選抜された生徒による演奏（オーケストラ、弦楽アンサンブル）で、ふだん学校ではなかなか演奏できないような

大曲に挑戦しようというものです（演奏曲目と指揮者は下記の通り）。初めて一緒に演奏するメンバーが、限られたリハーサル時間の中で集中して作り上げた演奏は、多くの参加者の刺激となりました。

三つ目は生徒同士の交流会で、音楽を愛する仲間のネットワークを大きく広げる場になっています。

●選抜合奏

〈オーケストラ〉

演奏曲目：ワーグナー／リエッツィ序曲

指揮者：河地 良智（洗足学園音楽大学名誉教授 前同大学副学長）

〈弦楽アンサンブル〉

演奏曲目：エルガー／序奏とアレグロ

指揮者：大川内 弘（元日本フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター）

●フェスタ出場校（59校）は以下のとおり。（ ）内数字は出場回数です。

〈宮城県〉 宮城第一高等学校(17) 富谷高等学校(11)

〈福島県〉 県立福島高等学校(20)

〈茨城県〉 清真学園高等学校・中学校(21)

〈栃木県〉 県立栃木女子高等学校(13) 県立鹿沼高等学校(11)

〈群馬県〉 県立桐生女子高等学校(20) 県立中央中等教育学校(10)

〈埼玉県〉 県立浦和西高等学校(21) 春日部共栄中学高等学校(23)

〈千葉県〉 県立千葉中学校・高等学校(21) 千葉市立稲毛高等学校・附属中学校(21)

聖徳大学附属女子中学校・高等学校(23) 県立千葉女子高等学校(23)

県立津田沼高等学校(17) 県立幕張総合高等学校(19)

成田高等学校・付属中学校(15) 県立船橋高等学校(14) 県立小金高等学校(7)

市川中学校・高等学校(5) 東邦大学付属東邦高等学校(4)

〈東京都〉 都立青山高等学校(19) 明治大学附属中野中学高等学校(21)

都立日比谷高等学校(12) 品川女子学院(12) 都立駒場高等学校(8)

田園調布学園中等部高等部(5) 都立西高等学校(4)

国際基督教大学高等学校(15) 明星学園中学校・高等学校(22)

明星中学高等学校(22) 玉川学園(8) 大妻多摩中学高等学校(4)

都立南多摩中等教育学校(4)

〈神奈川県〉 神奈川大学附属中・高等学校(14) 森村学園中高等部(11)

関東学院中学校高等学校(10) 県立川和高等学校(8)

聖光学院中学校高等学校(7) 慶應義塾湘南藤沢中等部・高等部(6)

日本女子大学附属高等学校(5) 清泉女学院中学高等学校(5)

〈新潟県〉 県立高田高等学校(11)

〈長野県〉 長野高等学校(21) 上田高等学校(16) 須坂高等学校(8) 長野西高等学校(8)

屋代高等学校(8) 小諸高等学校(11)

〈岐阜県〉 県立大垣南高等学校(7)

〈静岡県〉 浜松開誠館中学校・高等学校(13) 西遠女子学園(11)

〈京都府〉 京都女子中学・高等学校(21) ノートルダム女学院中学高等学校(5)

〈大阪府〉 府立清水谷高等学校(8)

〈岡山県〉 県立岡山朝日高等学校(13) 県立岡山城東高等学校(2)

〈広島県〉 山陽女学園中等部・高等部(8)

3) 全日本高等学校選抜オーケストラ・オーストリア公演2017

(平成29年3月25日～4月2日：オーストリア・ウィーン)

全日本高等学校オーケストラ連盟の主催・日本青年館の後援で、全国の中・高校生、大学生を対象に募集して選抜オーケストラを結成し、オーストリアでコンサートと交流会を行うことを通じて、一人ひとりの音楽性の向上と国際性を育てることを目的に毎年春休み期間に実施しており、今年度は第21回目の海外派遣となりました。

指揮者には、これまで高校オーケストラ事業をご指導いただいている、河地良智先生（洗足学園音楽大学名誉教授・前同大学副学長）をお招きしました。

2月11日～12日（東京都立駒場高等学校／国立オリンピック記念青少年総合センター）、3月25日～26日（山中湖畔荘清溪）の2回の練習合宿を経て、3月27日～4月2日の日程でオーストリアを訪問しました。参加者は、全国10の中学校・高校から計30人の生徒と、日本青年館職員・指揮者・引率教諭・旅行社・撮影班等含め、総勢40人でした。

3月25日より山中湖畔荘清溪で直前合宿を行った後、27日未明に羽田空港からオーストリア・ウィーンへ出発しました。ウィーン・ヴォテューフ教会で現地吹奏楽団との交流演奏会と、ウィーン少年合唱団の本拠地であるMuTh（ムート）での一般来場者対象のコンサート、計2回の演奏会は成功裏に終了し、ウィーン市内の観光や交流などで見聞を広げ、4月2日に全員無事に帰国しました。

コンサート概要、参加校は下記の通りです。

(1) コンサート（日時は現地時間）

①現地吹奏楽団との交流演奏会

3月29日（水） 19:00開演 会場：ウィーン・ヴォテューフ教会

演奏曲目：グルック／オーリードのイフィゲニア序曲

ドビュッシー／「小組曲」より“行列”、“バレエ”、レハール／金と銀
滝廉太郎／荒城の月、ベートーヴェン／第九より喜びの歌

②一般来場者対象のコンサート

3月30日（木） 19:30開演 会場：ウィーン少年合唱団コンサートホールMuTh

演奏曲目：ベートーヴェン／コリオラン序曲、レハール／金と銀

フォーレ／組曲「ペアレスとメリザンド」より前奏曲

ドビュッシー／「小組曲」より“行列”、“バレエ”

ルロイ・アンダーソン／シンコペーティッド・クロック

滝廉太郎／荒城の月、成田為三／浜辺の歌

(2) 参加者在籍校（全国10校より30人の演奏メンバーが参加）

《栃木県》 県立栃木女子高等学校

《千葉県》 県立船橋高等学校

《東京都》 都立総合芸術高等学校

国際基督教大学高等学校

捜真女学校

《長野県》 長野高等学校

上田高等学校

長野俊英高等学校

《京都府》 京都女子中学・高等学校

《広島県》 山陽女学園高等学校



また、例年、オーストリア公演の国内合宿に合わせて実施している「指揮法初級講座2016年度冬季」（全日本高等学校オーケストラ連盟の主催、日本青年館の後援）を、3月12日・日本青年館・虎ノ門事務所会議室にて開催しました。

9校9人の生徒・学生が参加し、指揮者の河地良智先生の指導により指揮法の基礎を学びました。参加者の在籍校は以下の通りです。

〈宮城県〉 仙台白百合学園高等学校

〈福島県〉 福島県立医科大学

〈栃木県〉 県立鹿沼高等学校

〈埼玉県〉 浦和明の星女子高等学校

〈千葉県〉 県立船橋高等学校

〈東京都〉 明星中学校・高等学校 麻布中学校・高等学校 都立富士高等学校

〈山梨県〉 都留文科大学

8. 第21回清溪セミナー（11月17日、18日 主婦会館）

地方自治体の若手政治家の研修・交流の場として実施してきました本セミナーは、日本青年館が建設中のため、会場を四谷駅前にある主婦会館に移しての開催となりました。参加者は25都道府県83名。今回の講座と講師は以下の通りです。

「児童虐待問題に切り込む」 (株)麻生飯塚病院小児虐待防止委員会

「地方交付税制度の役割」 元内閣官房長官 石原 信雄 氏

「安倍一強自民党と日本の政治の行方」

東北福祉大学特任教授 福岡 政行 氏

「行政に頼らない感動の地域づくり」

やねだん自治公民館長 豊重 哲郎 氏

「復興が日本を変える」 福島復興再生総局事務局長 岡本 全勝 氏

「住民主体の津波防災まちづくり」

静岡県牧之原市長 西原 茂樹 氏

9. 第72回田澤義鋪記念会（11月1日 明治神宮）

田澤義鋪の残した民主的平和的な社会教育上の精神と業績を伝え、これの実現に努めることを目的に、毎年、田澤義鋪記念会を開催しています。

72回目を迎えた今回は、大九報光会（大正9年の青年団明治神宮御造営奉仕を記念する会）および全国青年会館協議会の3団体の合同で、11月1日明治神宮の秋の例大祭にあわせて開催しました。活動報告の後、桜の聖母短期大学の三瓶千香子准教授より「田澤精神と大学教育」と題し、大学教育において田澤精神をどうかすかという視点での講演をいただきました。また、明治神宮の例大祭への参加は田澤会にとっても意義深く、三団体での合同により例年よりも賑やかになり、来年の再会を待ち望む声が多く聞かれた記念会となりました。

3月末には田澤会通信182号を発行しました。記念会の報告を中心に田澤記念館の出前講座など地域の情報も紹介することができました。

10. 国際交流活動

1) 中日青年交流センターとの交流

中日青年交流センターは、1984年、当時の中曽根康弘内閣総理大臣と中国の胡耀邦総書記との

共同発意によるもので、日中友好21世紀委員会が、その建設をそれぞれの政府に提唱し、日本政府の無償資金協力と中国政府の資金により1991年共同プロジェクトで建設された施設です。以来、日本青年館は施設の運営等について支援するため、中日青年交流センターから研修生を受け入れるなど施設間の交流を続けてきました。今年度の交流は以下の通りです。

(1) 中日青年交流センター中心幹部職員訪日団の受け入れ(4月4日～8日：山中湖、都内)

王捍忠(中日青年交流センター主任)を団長とする幹部職員8名が2年ぶりに来日しました。一行は山中湖畔荘清溪に宿泊した後、都内へ移動し、青年館建設工事現場を視察、進捗状況について説明を受けました。その後TOTO新宿ショールーム及びデサント東京事務所を見学し、公益社団法人日本中国友好協会では今後の青年交流について意見交換を行っています。また、国会を見学後、小里泰弘衆議院農水委員長を表敬した他、最終日には栃木県宇都宮市に向かい、宇都宮文星女子高校と文星芸術大学を視察しました。最後の夜は栃木県青年会館主催の歓送会場で友好を更に深め、無事に帰国しました。訪日団メンバーは以下の通りです。

団長	王捍忠	中日青年交流センター主任
秘書長	王希宏	中国国際青年交流センター環境保護基金部部长
団員	程雲寛	中国国際青年交流センターシルバーオリーブスポーツ世界総経理
団員	梁健	中国国際青年交流センター21世紀大厦総経理
団員	湯福華	中国国際青年交流センター世紀演出公司副総経理
団員	趙艶青	中国国際青年交流センター21世紀飯店副総経理
団員	呉昊	中日青年交流センター秘書
団員	何傑	日本刻字協会中国事務所所長

(2) 日本青年館訪中団の派遣(10月11日～17日：北京、成都、上海)

2年ぶりとなった訪中団は、北京21世紀飯店到着の夜に、中日青年交流センター共産党委員会書記の任晋陽氏の歓迎の宴を、翌日は中日青年交流センターの馬興民新主任による歓迎宴を受けた。翌日は四川省成都を訪問し、四川省青年連合会表敬訪問の他、鄧小平生家等を訪問し、上海経由で帰国した。訪中団の構成は以下の通り。

団長	山本信也	(一財)日本青年館常務理事
秘書長	江口芳人	(一財)日本青年館総務課長
団員	村上嘉彦	(一財)防長青年館維持会員
団員	小松倫人	(株)ニッセイ専務取締役
団員	椎名雅則	(株)ニッセイ日本青年館ホール副支配人
団員	渡辺政巳	(一財)宮城県青年会館副理事長
団員	坂本純治	(一財)日本青年館維持会員
団員	國廣京子	(一財)北海道青年会館評議員

2) 大韓民国・アルピナホテルへの訪問団の派遣

全国青年会館協議会加盟の青年会館との施設交流を通じて、日本と韓国とのあらゆる世代の文化・スポーツ等の交流を発展させると共に、韓国からインバウンド客の誘致の可能性を調査するために、下記の内容で代表団を派遣しました。

①代表団名簿 6名

山本信也	日本青年館常務理事	佐藤光保	岩手県青少年会館理事長
------	-----------	------	-------------

横山陽一 栃木県青年会館理事長 大坪勇郎 佐賀県青年会館理事長
江口芳人 日本青年館総務課長 小松倫人 (株)ニッセイ専務取締役

②アルピナホテル歓迎会出席者（5名）

チャ・インヨン 釜山観光公社アルピナ事業団団長（社長）
キム・グワンソク 同上 食飲料チーム長（レストラン総支配人）
ソン・イルグオン 同上 営業チーム長（営業課長）
キム・チョンス 同上 運営支援チーム長（総務課長）
チョン・ギュチョル 同上 営業チーム主任

③視察内容と今後の取り組み

アルピナホテルは釜山市観光公社の施設であり、日本の利用者は高校サッカーなどのスポーツ交流や修学旅行が中心となっています。今後も日本から青少年の利用促進を願っており、日本語版のパンフレットも作成していました。ホテルはユースとはいえ立派な施設であり、日本からの高校生はじめ青少年はもとより一般の利用にも適している施設といえます。

今後の取り組みとしては、アルピナホテル及び各県青年会館の宿泊施設としての相互PRについて検討していきます。また、来年度の全国青年会館協議会総会にアルピナホテルからの代表団を招待しております。

<アルピナホテルの概要>

ホテルは2004年に釜山市により建設されたユースホステルであり、客室数103室、宿泊人員469名、セミナー・宴会場8室のほかフィットネスクラブ、ゴルフ練習場、プール、サウナ、レストラン、インターネットカフェ、スカイラウンジの設備を有している。職員数は120名で総務、ホテル、宴会場、文化・スポーツ部と施設管理部門がある。

11. 関連事業

1) 全国青年会館協議会活動

各県における青年団運動の拠点としての役割を担う青年会館の建設は、昭和25年2月の佐賀県青年会館がスタートでした。その後、各地に青年会館の建設運動が起こり、現在20の都道県に青年団の手による青年会館が建設されています。それらの青年会館同士の連絡協調と青年団体の振興、地域社会の発展を図ることを目的として、全国青年会館協議会が組織され活動しています。

主な活動内容は、財団運営に関わる研修、青年団をはじめとする青少年団体への支援、施設運営のノウハウの相互交換など多岐にわたっています。また、中日青年交流センターとの交流など、国際交流も行い施設の運営等に役立っています。今年度は以下の活動を展開してまいりました。

(1) 総会（6月14日～15日 岡山県青年館）

今年度は15館から20名の出席があり、平成27年度の事業報告・決算及び平成28年度の事業計画・予算を承認・決定しました。総会終了後には、岡山県青年館の武市常務理事から「岡山県青年館の指定管理の取り組み」について報告をいただきました。「県立児童会館廃止決定」から「人と科学の未来館サイピア」の指定管理実現に至る県内事業者とのネットワーク、行政との駆け引きなどについて報告があり、指定管理の在り方について考えさせられる内容でした。

その後の各青年会館からの報告では、4月14日の前震、16日の本震で震度7という強い地震に見舞われた熊本県青年会館の小山理事長から、緊急見舞金へのお礼と復旧状況について報告がありました。翌日は岡山県青年館が指定管理者である「人と科学の未来館サイピア」を訪れ、プラネタリウムを見学したほか、子どもたちに人気の科学実験にも参加しました。なお、来年度の総会は新しい日本青年館で開催することが決定されました。

(2) 理事会 (平成29年3月14日 日本青年館虎ノ門事務所)

平成28年度決算見込み、平成29年度事業計画と予算について審議するために理事会を開催しました。理事会では、これからの各県青年会館の運営について議論がありました。また、平成29年度総会は8月1日、2日とすることを決めました。あわせて、来年度が役員改選期にあたるため、平成29年度から30年度の2年間の任期の役員体制について協議し、現体制で総会に諮ることとしました。

(3) 理事長会 (11月1～2日 明治神宮ほか)

今年度は、毎年、11月1日に明治神宮において開催している大九報光会にあわせて理事長会を開催しました。14会館から20名の役職員が出席しました。桜の聖母短期大学キャリア教養学科准教授の三瓶千香子氏による「田澤精神と大学教育」と題した講演のあと、明治神宮秋の大祭に参列し、翌日は各青年会館による情報交換のあと、青年館建設工事現場を視察し散会しました。

(4) 加盟青年会館一覧 (平成29年4月1日現在)

一般財団法人北海道青年会館	〒060-0806	札幌市北区北六条西 6-3-1	TEL011-726-4235
一般財団法人岩手県青少年会館	〒020-0196	盛岡市みたけ 3-38-20	TEL019-641-4550
一般財団法人宮城県青年会館	〒983-0836	仙台市宮城野区幸町 4-5-1	TEL022-293-4631
一般財団法人秋田県青年会館	〒011-0905	秋田市寺内神屋敷 3-1	TEL018-880-2303
福島県青年会館	〒960-8103	福島市舟場町 3-26	TEL024-523-1484
茨城県立青少年会館	〒310-0034	水戸市緑町 1-1-18	TEL029-226-1388
(公益社団法人茨城県青少年育成協会)			
一般財団法人栃木県青年会館	〒320-0066	宇都宮市駒生 1-1-6	TEL028-624-1417
群馬県青少年会館	〒371-0044	前橋市荒牧町 2-12	TEL027-234-1131
(公益財団法人群馬県青少年育成事業団)			
一般財団法人福井県青年館	〒910-0005	福井市大手 3-11-17	TEL0776-22-5625
一般財団法人静岡県青少年会館	〒420-0068	静岡市葵区田町 1-70-1	TEL054-255-2566
一般財団法人愛知県青年会館	〒460-0008	名古屋市中区栄 1-18-8	TEL052-221-6001
一般財団法人滋賀県青年会館	〒520-0851	大津市唐橋町23-3	TEL077-537-2753
一般財団法人島根青年館	〒690-0033	松江市大庭町 1751-13	TEL0852-21-2818
一般財団法人岡山県青年館	〒700-0081	岡山市北区津島東 1-4-1	TEL086-254-7722
一般財団法人防長青年館	〒753-0064	山口市神田町 1-80	TEL083-923-6088
特定非営利活動法人高知県青年会館	〒781-2122	吾川郡いの町天王北 1-14	TEL088-891-5300
一般財団法人佐賀県青年会館	〒849-0923	佐賀市日の出 1-21-50	TEL0952-31-2328
一般財団法人熊本県青年会館	〒862-0950	熊本市水前寺 3-17-15	TEL096-381-6221
一般財団法人鹿児島県青年会館	〒890-0005	鹿児島市下伊敷 1-52-3	TEL099-218-1225
一般財団法人沖縄県青年会館	〒900-0033	那覇市久米 2-15-23	TEL098-864-1780

(事務局)

一般財団法人日本青年館 〒105-0001 港区虎ノ門3-23-6 秀和虎ノ門三丁目ビル4階 TEL03-6452-9015

2) 全国青年団0B会総会北海道大会の開催 (9月4日～5日 定山溪ビューホテル)

今年度は、札幌市定山溪温泉にて、30都道府県から188名(道外114名、道内74名)の参加を得て開催しました。

総会では、通常の議案に加え、幹事長特別提案として3代目となる日本青年館の建設募金への協力について呼びかけがあり、全体で承認されました。その後の記念講演は、北海道博物館研究部長兼アイヌ民族文化研究センター長の小川正人氏より、「いまアイヌ語地名を歩く」とし、北海道に多数残るアイヌ語由来の地名についての解説が行われました。

また、夜の交流パーティーでは民謡「江差追分」やアイヌ民族舞踊が披露され、地域の文化に触れながら、旧交を温めました。

翌日は北海道博物館の見学を行ったのち、札幌市のホテルポールスターにてお別れ昼食会を開催し、次年度の再会を誓い合い終了しました。

今後の総会予定は以下の通りです。

①第36回総会熊本大会 平成29年10月 9日（月）～10日（火）ホテル日航熊本

③第37回総会福井大会 平成30年10月21日（日）～22日（月）あわら温泉

3) 大九報光会（11月1日 明治神宮）

明治神宮造営に際し、全国の青年団が労力奉仕にあたり、そのことがきっかけとなって日本青年館は誕生しました。その造営の労力奉仕に参加された方々が1950年（昭和25年）11月1日、明治神宮御鎮座30年祭に参加された折、そのことを記念して大九報光会を結成しました。「大九」とは、明治神宮御鎮座の年、大正九年に由来し、さらに耐乏生活に耐え、光明と希望に生きる耐久生活にもかけて命名されたものです。以来、ほぼ毎年11月1日に労力奉仕に参加された方の二世、三世の方々等により明治神宮において総会が開催されています。

今年度も田澤義鋪記念会並びに全国青年会館協議会と合同にて開催し、合計53名の参加となりました。午前中は、桜の聖母短期大学キャリア教養学科准教授の三瓶千香子氏による「田澤精神と大学教育」と題した講演のあと、秋の大祭に全員で参列しました。

4) 清溪フォーラム行政懇談会（10月28日～29日 宮城県大崎市）

青年団出身の首長で組織している清溪フォーラムの今年度の行政懇談会は宮城県大崎市において開催しました。出席会員は伊藤大崎市長、大西長門市長、若生富谷市長、保坂甲斐市長の4名と日本青年館から山本常務、江口総務課長。大崎市から「農業政策」と「危機対策の取り組み」についての事例発表を受けての意見交換のあと、大崎市民病院を視察しました。夕食懇談会には宮城県青年会館から石垣理事長、渡辺副理事長、加藤常務、大橋宮城県涌谷町長、山形県南陽市の塩田前市長、富山県魚津市澤崎前市長をはじめ、大崎市教育長・議長など青年団OB関係者が参加しました。翌日は国土交通省重点道の駅に指定されている「あ・ら・伊達な道の駅」他を視察して散会しました。

会員は以下の通り（敬称略）

会 長	伊藤	康志	（宮城県大崎市長）
幹 事 長	大西	倉雄	（山口県長門市長）
幹 事	若生	裕俊	（宮城県富谷市長）
	金森	勝雄	（富山県舟橋村長）
監 事	保坂	武	（山梨県甲斐市長）

5) 全国青年団OB県議の会奨励賞の贈呈

平成16年に、全国の青年団への支援と地域社会の発展に寄与する事を目的として、青年団出身の県議会議員によって結成されました。今年度の現役青年団活動への奨励賞は、3月3日～5日に開催された全国青年問題研究集会において、沖縄県北中城村青年会連合

会の「沖縄県北中城村東北エイサープロジェクト ～東日本へ北中城から～」(東日本大震災の被災地でエイサーを披露する支援だけでなく、被災者の声を聞き、地元沖縄で報告会を開いて共有した取り組み)に贈呈しました。

会員名簿は以下の通り(敬称略)

会	長	内田	博長	(鳥取県)			
幹	事	長	宮本	光明	(富山県)		
幹	事		木本	利夫	(石川県)		
会	員		青山	秋男	(愛知県)	伊藤	保(鳥取県)
			大野	久芳	(富山県)	瀬川	光之(長崎県)
			中野	一則	(宮崎県)	三浦	治雄(滋賀県)
						御手洗	吉生(大分県)
監	事	田中	敏幸	(福井県)			

12. 後援・協力事業

今年度、日本青年館が依頼を受けて後援・協力をした事業は下記のとおりです。

- ① 版画フォーラム2016年和紙の里ひがしちちぶ展 (平成28年6月18～25日)

〈主催者〉 版画フォーラム実行委員会

後援名義使用、日本青年館賞提供

- ② 第42回太陽美術展 (平成28年11月16日～11月24日)

〈主催者〉 太陽美術協会

後援名義使用、日本青年館賞提供